

平成19年度 湿地管理に関する勉強会 いのちの宝庫・湿地

西村 朱吉史・荒川 秀夫・小谷 繁子・武田 禎子・松原 朋恵・宮村 良雄
(平成19年度湿地管理に関する勉強会受講生)

コウノトリ野生復帰への課題

かつて、日本で暮らしていたコウノトリは、昭和46年豊岡を最後に日本の空から姿を消しました。兵庫県・豊岡市は昭和40年から粘り強く人工飼育に取り組み、平成17年初の放鳥に成功しました。さらに平成19年には、46年ぶりに野外でヒナが巣立ちました。

平成20年2月現在、19羽のコウノトリが豊岡の空を舞っています。しかしその一方で、放鳥した多くのコウノトリが、コウノトリの郷公園の餌に頼った生活をしており、野外での「自立」に大きな課題があります。

コウノトリとは？

コウノトリは羽を広げると2mにもなる大型で肉食の鳥です。飼育下では一日に約500g（ドジョウに換算すると約80匹）もの餌をたいらげます。そのくせ、餌をとるのが下手なので、コウノトリにとって餌がとりやすくて、たくさんの餌となる生きもの（魚・カエル・バッタ・ヘビなど）が生息する場所が必要です。



湿地で餌を採るコウノトリ

湿地が重要！～なぜ湿地が必要？～

「湿地」は生きものの生産力が非常に高く（熱帯雨林と同じくらいの力がある）生息する生物の種類も多いので、たくさんの餌を食べるコウノトリにとって重要な場所です。しかし、「湿地」はほったらかしにしておくと植物が生えてきたり、水がなくなったりしてどんどんと埋っていき、最後にはなくなってしまいます。自然界ではそれでよいのですが、コウノトリが豊岡で自立して暮らしていくには生きものがうじゃうじゃいる「湿地」を継続させなければなりません。

ずっと湿地を継続させるために「維持管理」をしよう

豊岡市では、「コウノトリのエサ場としての湿地」の維持管理に関する技術・知識を学ぶ「湿地管理に関する勉強会」を平成19年6月からスタート。全6回の勉強会で、25名の受講生がコウノトリの必要とする湿地の生態系・魚類・植物・維持管理等について学び、最終回のワークショップでまとめました。

発表内容：

- ①平成19年度 湿地管理に関する勉強会ワークショップのまとめ
 - ・コウノトリ
 - ・多様な生態系
 - ・魚
 - ・植物
 - ・維持管理
- ②湿地管理に関する勉強会レポート（勉強会内容と写真）
- ③豊岡市（仮称）ハチゴロウの戸島湿地整備計画

湿地管理に関する勉強会開催状況：

◎受講生25名

回数	日程	テーマ・講師
第1回	平成 19 年 6 月 17 日	<基調講演>「コウノトリの舞い降りる湿地とは？」 講師：兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員 三橋 弘宗 氏 <実地研修>「(仮称)ハチゴロウの戸島湿地」
第2回	平成 19 年 7 月 16 日	<視察研修>「福井県 中池見湿地 湿地管理の実例について」 講師：NPO ウェットランド中池見 笹木 進 氏 講師：株式会社環境アセスメントセンター 関岡 裕明 氏
第3回	平成 19 年 8 月 19 日	<基調講演>「湿地 ～復元と管理～」 講師：NPO 大阪自然史センター 梅原 徹 氏 <実地研修>ハチゴロウの戸島湿地の植物とその管理
第4回	平成 19 年 9 月 30 日	<基調講演> 「円山川下流域の魚介類の生息環境について」 講師：円山川漁業協同組合 事務局長 福井 泉 氏 「(仮称)ハチゴロウの戸島湿地に遡上する魚たち」 講師：復建調査設計株式会社 技術士 若宮 慎二 氏 「湿地への魚類誘引手法」 講師：アマタ持続可能経済研究所 本多 清 氏 <実地研修>湿地へ遡上する魚類の調査・汽水域見学
第5回	平成 19 年 10 月 28 日	<基調講演>「湿地再生の考え方と豊岡の湿地植生について」 講師：NPO 法人 コウノトリ市民研究所 菅村 定昌 氏 <実地研修>加陽堤外田の植物
第6回	平成 19 年 12 月 2 日	<ワークショップ>コウノトリ湿地ワークショップ ファシリテータ： 兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員 三橋 弘宗 氏 NPO 大阪自然史センター 梅原 徹 氏 復建調査設計株式会社 技術士 若宮 慎二 氏 NPO 法人 コウノトリ市民研究所 菅村 定昌 氏 東邦大学大学院 武田 広子 氏